

# 香港日本人学校香港校小学部グローバルクラスにおける 探究型授業「グローバルスタディーズ」の実践

前香港日本人学校香港校小学部教諭

大分県大分市立明野北小学校教諭 二宮 健吾

キーワード：探究的な学習、国際バカロレア、教科横断的な学習、with コロナの取り組み

香港日本人学校香港校 Hong Kong Japanese School

URL: <http://www.hkjs.edu.hk/hkjspri/>

児童生徒数：小学部 233 人 中学部 166 人(令和2年12月10日現在)

## 1. はじめに

香港日本人学校香港校小学部への赴任が決まった。教員として採用されて以来13年間ひたすら「中」学校の英語科教員として経験を積んできた私にとって、初の在外教育施設勤務に期待を膨らませながらも、初の「小」学校勤務、しかも「グローバルクラス」という特別な学級を受け持つことを伝え聞き、香港に赴任する前は何を準備してよいかも分からずに不安で一杯であったことを今でも思い出す。

赴任してみると、1年目は超巨大台風が襲われ、2年目は抗議デモで生活圏が戦場同様と化し、3年目は新型コロナウイルスの影響で当たり前が当たり前ではない状況に…私の香港での3年間は実に刺激的であった。しかし、そんな中でも1、2年目はグローバルクラス6年生の学級担任、3年目にはグローバルクラス主任という、3年間非常に特殊な環境で貴重な教育実践を積むことができた。

本報告書ではグローバルクラスについて、グローバルクラスの大きな特色である探究的な学習の授業「グローバルスタディーズ」の実践、そしてコロナ禍における取り組みの一例を紹介したい。

## 2. グローバルクラスについて (グローバルクラスホームページ: <https://hkjsglobalclass.wixsite.com/hkjsgc>)

グローバルクラスは香港日本人学校香港校小学部内に、変化の激しいグローバル社会を主体的に生き抜いていく児童を育成することを目標として平成28年に設立された。4年生から6年生まで各学年1学級ずつで構成され、各学級最大20名が在籍している。児童は試験を経て編入しており、基礎的な英語運用能力はもちろん国語、算数等の基礎学力も身に付けている。

学級担任は日本人と英語ネイティブの2人体制で、児童は授業や学活だけでなく、昼食時間や休み時間等いつでも英語で先生とコミュニケーションをすることができる環境にある。また、半分以上の授業が英語で行われ、特に算数と理科の授業では、児童は日本の検定教科書の英語版を使用し、その内容を英語で学習している(英語イマージョン教育)。

国外居住に当たり、語学力向上の機会を求めてインターナショナルスクールを選ぶ日本人家庭が増えてきている中で、日本の学習指導要領に基づく教育や学校生活を行いながらも、同時に英語を積極的に学ぶことができるのが大きな特徴であり、香港内の日本人居住者が大幅に減少する中でも、毎年定員を大きく上回る児童が編入を志願している。

また、グローバルクラスは公益財団法人海外子女教育振興財団が文部科学省より受託された「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業(AG5)」の提携校として、講師招聘や日本出張等を通して先進的・

実践的な研究を進めている。(AG5 ホームページ : <https://ag-5.jp/>)

### 3. 探究型授業「グローバルスタディーズ」

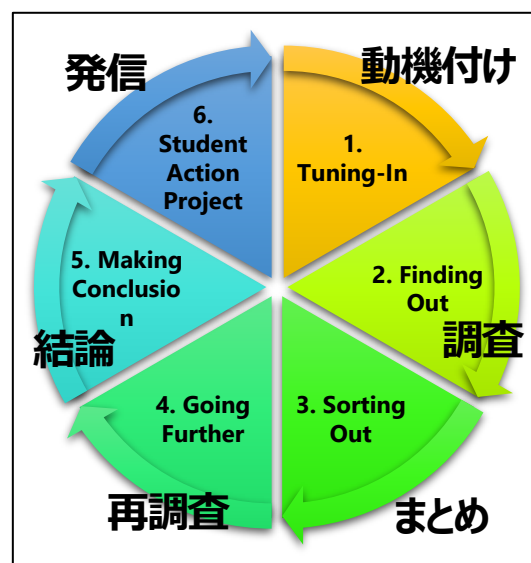
グローバルクラスの大きな柱である探究型授業「グローバルスタディーズ」は「諸問題の課題解決に必要な知識と 21 世紀型スキルを獲得し、社会事象に関する概念の再構築をすると共に、諸問題を解決しようとする主体的な姿勢を育むこと」を目標とし、英語と日本語のバイリンガルで行われる授業である。主な特徴は以下の通りである。

- ・国際バカロレア (International Baccalaureate : 以下 IB と略す) の初等科課程プログラム (Primary Years Programme : 以下 PYP と略す) を参考にした探究型授業づくりをしている。
- ・PYP の探究の授業 (Unit of Inquiry : 以下 UOI と略す) で扱う教科の枠を超えた 6 つのテーマを参考にしながら、各学年の社会と理科の内容をもとに、各学期に 1 つのトピックを設定して探究する。トピックとしては、「水」、「環境と持続可能社会」、「多様性」、「イノベーションテクノロジーとその影響」「ガバナンスと人々の暮らし」等がある。
- ・各トピックに対して UOI の探究の進め方 Inquiry Cycle (探究サイクル) を活用して、探究を進めている。

【下図参照】

- ① Tuning In (動機付け) → ② Finding Out (調査) → ③ Sorting Out (まとめ) →  
④ Going Further (再調査) → ⑤ Making Conclusion (結論) → ⑥ Student Action Project (発信)

- ・単元の初めの導入時やリサーチ時等、校外学習をはじめ、多くの体験学習が授業の一環で組み込まれている。
- ・校外学習やインターネット等を活用した調査活動や話し合い、ロールプレイ、プレゼンテーション等が多く行われる。
- ・探究の最後となる Student Action Project では、自作ビデオやオリジナル劇を作ったり大臣に手紙を送ったりと、各トピックで学んだことを自分たちの中で終わらせずに、校内の友達や保護者等に発信する。
- ・6 年生の 3 学期には 3 年間で学んだことを生かし、自分で選んだトピックを探究し発表する卒業発表会 (Exhibition) を行う。



Inquiry Cycle : 探究サイクル

### 4. 探究型授業「グローバルスタディーズ」の授業の実践

#### (1) 概要

ここでは、私が 2019 年に 6 年グローバルクラスの担任として 1 学期に行ったグローバルスタディーズの実践について紹介したい。6 年生 1 学期のグローバルスタディーズのトピックは「紛争と平和構築」である。

当時の香港は、政府が発表した逃亡犯条例の廃止を求める市民によって大規模デモが毎週のように発生していた。デモの影響でショッピングセンターが閉鎖されたり、デモによる渋滞で交通機関が麻痺し、登下校が時間差で行われたり等、児童の生活にも影響が出始めていた頃であり、身近に「争い」を感じながらの探究活動となった。

#### (2) 授業の実践

##### ① Tuning In : 動機付け

まず単元の初めとして、「争い」といえば何が「見」え、何が「聞」こえ、何を「感」じられるかをワ

ークシートに書き出していく活動を行った。それらをまとめてみると、児童から出てきたのは「ホロコースト」や「大量殺戮」、「原子力爆弾」、「人種差別」等、同じ地球上では起きているものの、自分からは遠く、関係ないと捉えがちなものを連想していることが分かった。

その後、自分の身の回りにはどのような「争い」が起きているか、その原因は一体何なのかを考えてまとめていくと、「いじめ」や「きょうだいげんか」等の身近で起きている「争い」が少しずつ出てくると共に、その当時社会科で学習していた日本の歴史でもたくさん「争い」が起きていたことに気が付いた。そこで、次の段階として、日本で今まで起きた争いについてリサーチし、まとめていくことになった。

Key Words & Key Phrases of Conflict	
NAME( <small>key</small> )	)
( Holocaust )	)
( Hitler )	)
( Greed )	)
( Sadness )	)
( Fear )	)
( Terror attack )	)

「争い」から連想するもの  
(児童のワークシートより)

## ② Finding Out : 調査

この時の調査対象は日本の歴史上の争いとし、個別での調査とした。既に学習した「卑弥呼の時代の争い」やまだ習っていない「日清戦争」、「二・二六事件」等もテーマとして選ばれ、児童は社会科の教科書や資料集をはじめ、図書館の本、インターネットを活用してリサーチを進めた。

## ③ Sorting Out : 調査のまとめ

日本史上の争いのリサーチ後の発表のための評価ルーブリックを作成する中で、発表の際に聞く側が理解しやすいように、争いの「背景」「原因」「結果」「影響」の4つの項目を意識してまとめることとした。また、その際には国語の授業で学習した相手に伝わりやすい書き方を意識するように促した。

児童が作成した調査結果をブックレットにまとめ、それを使っての発表を保護者参観の日に行った。その後の振り返りでは、「同じような原因で争いが起きているらしい」ことや「争いの後にはその地域や国にいろいろな変化が起きる傾向がある」こと等、比較したりまとめたりすることにより、争いとは何かを児童の頭の中で少しずつ概念化している様子が見られた。

## ④ Going Further : 再調査

児童は争いの起きるメカニズムやその影響について以前よりも知識を深めることができたが、一見遠くで起きている争いも実は自分たちに無関係ではないことに気付かせ、またその争いをどうやって解決させるのかを考えさせるために、Going Further では他の数例の争いを提示した。

まずはアフリカのコンゴ民主共和国で起きている、レアメタルを巡る紛争やそれによる子どもたちの貧困問題、および子ども兵士について学習した。遠いアフリカの同世代の子たちの貧困に苦しむ様子や兵器を持つ様子を嘆く児童に、その争いを起こしているレアメタルが携帯電話を作る上で重要な資源であることを伝えた時には、「まさか自分たちとこの争いがそのような形でつながっているとは思わなかった」との感想が聞かれた。

次に、香港で起きている抗議デモについての学習をした。児童はアヘン戦争等、香港の植民地時代から今までの歴史について学んだ後に、香港人の英語の先生によるワークショップで、抗議デモが起きた経緯や政府と民主派の双方の考えを知ることができた。双方の考え方を理解できた子どもたちは、何とかして解決することはできないかと激しい話し合いを行った。

その後も、東京築地市場や京都の観光地等で起きている外国人観光客問題や、映画撮影地となったために人気が出てしまったマンションに住む人々のプライバシーが侵害された問題を取り上げた。プライバシー侵害の問題を学習した際には、関係者を洗い出し、ロールプレイのような形式でそれぞれの関係者の立場を考え、どのようにしたら解決できるかをディスカッションした。

### ⑤ Making Conclusion : 結論

振り返りワークシートを使って、「争いと平和構築」の探究に関する児童なりの結論付けを行った。探究の初めの頃は、「争い」を感覚的に漠然と捉えていた児童たちが探究を進めていく中で、より具体的に「争い」をとらえ、「平和構築」するために自分たちにできることやそのために必要なことを考えるようになったことが記述から見受けられた。

### ⑥ Student Action Project : 発信

児童に何をどのような形で発信したいか尋ねたところ、香港で起きている抗議デモについての映像をつくり、それを校内の友達や先生、保護者に見てもらいたいということとなった。



香港デモについて伝える自作ビデオの様

ビデオには、デモが発生する原因となった逃亡犯条例の詳しい説明やデモの様子、子どもたちが関係者になって話し合うロールプレイの様子が収められ、児童なりに考えた解決策についても英語と日本語字幕で説明された。また、ビデオの最後には「争いは人類にとって必要か」という質問に対する全員の回答を入れた。その回答を見ると、興味深いことに全員が「争いの方法は考慮すべきであるが」との前提条件付きで、「人類の進化成長にとって、争いは必要である」と回答していた。この回答は単元の始めには決して出てくることがなかったものであり、探究を通して児童の考え方が深化したことは非常に興味深いものであった。

また、このビデオ作りには、教師は内容を導くファシリテーター、そしてカメラマンとしてのみ参加した。情報収集からインタビュー、シナリオ作りから脚本、ビデオ編集、字幕等のテロップ編集に至るまで、そのほとんどを児童だけの力で作り上げたことにとっても驚いた。探究活動を十分に保障したことにより、それを伝えたいという思いがこの意欲的な取り組みにつながったと考えられる。

### (3) 実践の成果と課題

この単元のねらいは「紛争の原因にはさまざまなものがあることを理解する」「紛争や平和が自分たちの生活とどのようにつながっているかを見出す」「平和構築のために私たちがどのように貢献できるかを考える」であったが、児童の感想や振り返りを見ていくと、探究が進むとともに概ね達成できていたことが分かる。

また、社会科の授業で学んでいることや実際に身の回りで起きている争いを取り上げることによって、児童はより興味を持って探究に取り組むことができていたようであった。

しかしながら、児童の探究したい内容を中心に授業を展開したために、単元のねらいから逸脱してしまうこともあった。IB のセントラルアイディアを、探究活動の羅針盤のようなものとしてしっかりと掲げた上で探究を進めていく必要性を感じた。

また、民主化デモの影響で校外学習に行けなかったことも非常に残念だった。香港歴史博物館や日本の国会議事堂にあたる香港立法議会を訪れて、情報収集や政治家への直接インタビュー等ができたらもっと充実した探究になったであろうと考える。

## 5. コロナ禍における自由研究発表会「プレゼンテーション アセンブリー」

新型コロナウイルスの感染拡大に対する香港政府の措置は非常に厳しく、令和 2 年度に児童が終日登校できた

のはたったの5日だけであった。そんな状況の中でも、「学びを止めない」というスローガンのもと、「オンライン会議アプリ Zoom (Zoom Video Communications)」や「ロイロノート (ロイロノート・スクール)」、「グーグルクラスルーム (Google)」等を駆使して、探究型授業を継続して行った。

例年夏休み後に行う自由研究発表会「プレゼンテーション アセンブリー」も Zoom を利用して行ったが、Wi-Fi 環境や ICT 機器を活用する上での準備等、我々スタッフの不安をよそに、結果的には大成功に終わった。特に、海外ということで普段は児童の発表会を参観することができない日本に住む児童の家族や他国の日本人学校の先生方が参観できたところに、ICT の活用やオンライン学習の可能性を一層感じることができた。



オンラインで行った自由研究発表会の様子

## 6. 終わりに

新学習指導要領には、VUCA (変動、不確実、複雑、曖昧) の時代を子どもたちが生き抜くためには、メタ認知を働かせ、身に付けた知識や技能を次の学びや生活に生かすことができる力を育むような授業にしていなくてはならないと謳っている。そのような授業をつくるためには、今日の教師には、一斉授業の上手さのみならず、子ども一人ひとりの学びを支え導くとともに、協同的な学びをファシリテートする力が求められるのであろう。まさに私は、探究型授業「グローバルスタディーズ」でそれを体感し、実践することができた。私はこの実践を自分だけのものとせず、積極的に還流していきたい。また、IB や教科横断的な学習を生かした英語や総合的な学習の時間の授業を展開していきたい。

いずれにせよ、私は新時代の教育を担うにあたり、現状に甘んじることなく、自己を常に振り返りながら、同僚教師と共に教師たるべく実践・研修に励んでいきたい。

## 参考文献

- ・国際バカロレア機構 (2016) 「PYP のつくり方：初等教育のための国際教育カリキュラムの枠組み日本語版」 (URL: <https://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/pyp-making-the-pyp-happen-jp.pdf> )
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領」 (平成 29 年告示)
- ・公益財団法人海外子女教育振興財団 (2021) 「日本人学校における『探究学習』のすすめ ～実践ガイドブック～」 第 1 部理論編 (URL: <https://www.ag-5.jp/cms/ag5/common/pdf/theme1/tankyuugakusyuuunosusume.pdf>)
- ・大迫弘和 (2016) 「アクティブラーニングとしての国際バカロレアー『覚える君』から『考える君』へー」 日本標準
- ・大村はま 「教えるということ」 ちくま学芸文庫 2017 年 5 月 20 日 第 32 刷
- ・苫野一徳 「教育の力」 講談社 2018 年 2 月 13 日